

山梨県中巨摩郡橈形町

八田畑遺跡

—県営住宅橈形小笠原団地建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

1998.3

山梨県教育委員会
山梨県土木部

山梨県中巨摩郡橈形町

八田畑遺跡

—県営住宅橈形小笠原団地建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

1998.3

山梨県教育委員会
山梨県土木部

序

本書は、1997（平成9）年度に実施した、中巨摩郡櫛形町に所在する八田畑遺跡の発掘調査報告書であります。当埋蔵文化財センターが1982（昭和57）年に設立されて以来、これまで刊行してまいりました報告書は、1994（平成6）年度にはすでに100集を越えており、本書で150集となります。

今回の調査は、山梨県土木部住宅課が行う県営住宅櫛形小笠原団地建設に伴うもので、13,000㎡の予定地内を試掘調査して遺跡範囲を確認し、そのうちの2,600㎡を本格的に発掘調査いたしました。

本遺跡は、甲府盆地の西部を流れる御勅使川と、この地域一帯の小河川が造る巨大な扇状地の上に立地しております。試掘調査で弥生時代の土器片が出土し、この一帯に何らかの遺構の存在が期待されました。しかし今回の本調査の結果においては、弥生時代前期から後期にかけての土器片が出土したのみで、遺構は発見されませんでした。出土した土器については、氾濫によって流されてきたものが多いようです。遺構として発見されたものでは、集石遺構が3基ありますが、こちらについては出土状況からも、近代以降のものと思われれます。

峡西地域においては、ここ数年の間に、国道52号・中部横断自動車道関係の調査で、特に弥生時代中期の遺構・遺物の発見が増加しております。とはいえその数は依然として少なく、この時期の遺跡の立地や集落構造など、解明できていない部分が多く残されております。今回の調査では、残念ながら遺構は発見されませんでした。この地域の弥生時代の遺跡の立地を考える上で、ひとつの成果が得られたものと考えます。今回の調査の成果を、今後の研究の資料として御活用いただければ幸いです。

末筆ながら調査にあたって御指導・御協力を賜った関係機関各位、並びに調査・整理に従事された方々に厚く御礼申し上げます。

1998年3月

山梨県埋蔵文化財センター
所長 大塚初重

例 言

- 1 本書は、1997（平成9）年度に実施した山梨県中巨摩郡櫛形町小笠原字八田畑に所在する八田畑（はったばた）遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は県営住宅櫛形小笠原団地建設に伴う事前調査であり、山梨県教育委員会が山梨県土木部住宅課より委託を受け、山梨県埋蔵文化財センターが実施したものである。
- 3 本書の執筆は小林健二、市川恵子、清水裕司、依田幸浩が行い、編集は小林が行った。
- 4 遺物の実測、トレース、図面原稿整理については、垣内律子、望月厚子、渡部さつみの諸氏の協力を得た。
- 5 本遺跡にかかわる出土品・記録図面・写真等は一括して山梨県埋蔵文化財センターに保管してある。

凡 例

- 1 遺構・遺物挿図の縮尺は原則として次のとおりである。
[遺構] 全体図・出土土器分布図 1/400、集石遺構平面図・エレベーション 1/20
[遺物] 土器実測図・拓本 1/2・1/3、礫実測図 1/2
- 2 遺構断面図中の、レベルポイント部分にある数字は標高を表す。
- 3 本書の土色表示は、農林水産省水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』1990年度版を用いている。

目 次

序	
例言・凡例	
第1章 調査の経緯と概要	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 発掘調査の概要	1
第3節 調査組織	1
第2章 地理的環境	2
第1節 遺跡の立地	2
第2節 周辺の遺跡	2
第3節 遺跡の層序	5
第3章 発見された遺構と遺物	7
第1節 弥生時代の遺物	7
第2節 集石遺構	10
第4章 まとめ	12
第1節 弥生土器について	12
第2節 集石遺構について	14

挿図目次

第1図	遺跡位置及び周辺遺跡分布図(1:25,000)	3
第2図	調査区位置図(1:5,000)	4
第3図	土層観察地点(1:500)と土層断面図(1:40)	5
第4図	遺跡全体図(1:400)	6
第5図	弥生時代包含層出土土器分布図(1:400)	7
第6図	弥生時代包含層出土土器(1:2・1:3)	9
第7図	集石遺構平面図・エレベーション(1:20)	11
第8図	集石遺構 擦痕・敲打痕のある礫(1:2)	14

表目次

第1表	集石遺構礫計測値一覧	10
-----	------------	----

図版目次

図版1	1. 表土剥ぎ及び西壁調査風景 2. 東壁土層断面 3. 北側調査風景
図版2	1. 自然流路 2. 集石遺構検出風景 3. 集石遺構全景 4. 集石1 5. 集石2 6. 集石3
図版3	1. 南側調査風景 2・3. 弥生土器出土状況 4. 包含層出土弥生土器

第1章 調査の経緯と概要

第1節 調査に至る経緯

甲府盆地の西部、中巨摩郡櫛形町一帯では、断続的に宅地化が進んでいる。そんな中、同町小笠原地内にある東洋カーボン社グラウンド内に県営住宅櫛形小笠原団地の建設が計画され、山梨県土木部住宅課より県学術文化課へ埋蔵文化財の有無の確認依頼がなされた。県埋蔵文化財センターでは事業に先立って、平成8年（1996）7月25日から8月19日までの17日間にわたって試掘調査を実施した。団地建設予定地の対象面積約13,000㎡に、合計17地点の試掘坑を設定し、バックホーによる大まかな掘削と人力による精査を併行し、遺構・遺物の確認を行った。その結果、建設予定地内の北半分を設定した試掘坑で、地表下約60～90cmの黒褐色土層から弥生時代中期から後期にかけての土器片が出土した。遺物の量は少なかったが、この一帯に何らかの遺構が存在することが予想され、2,600㎡について本格的な調査を実施することとなった。遺跡は平成元年度に櫛形町教育委員会が実施した詳細分布調査の際に「八田畑遺跡」とした範囲の南側にあたるが、同じ小字名から八田畑遺跡と命名した。

発掘調査は平成9年5月6日から同年9月6日まで実施し、報告書作成は平成10年1月から3月まで行った。

第2節 発掘調査の概要

調査は試掘調査の成果をもとに、幅約35m、長さ約75mを対象とし、一辺5mの方眼を設定して行った（第3図）。表土の剥ぎ取りは、バックホーにより黒褐色土の直上まで除去し、以下は人力により掘り下げた。黒褐色土は調査区北側と南側に20～40cmの厚さで堆積しており、ここから弥生時代前期を含む後期までの土器片が出土した。調査区中央部は礫層で覆われており、北西部で自然の流路が確認されたのみで該期の遺構は発見されなかった（第4図）。

本遺跡で唯一の遺構は、調査区の北東端で発見された集石遺構である。10～15cm大の礫を円形に並べたものが3基あり、2基については南北に並び残りの1基はズレているが、建物の根石になる可能性もある。時期については、コンクリート片などが付着した礫があることから、近代以降のものとみられる（第1表・第7図）。

（小林健二）

第3節 調査組織

調査主体	山梨県教育委員会
調査機関	山梨県埋蔵文化財センター
調査担当	小林健二（山梨県埋蔵文化財センター文化財主事） 市川恵子（山梨県埋蔵文化財センター文化財主事） 清水裕司（山梨県埋蔵文化財センター主任・文化財主事） 依田幸浩（山梨県埋蔵文化財センター非常勤嘱託）
作業員・整理員	秋山進也、今津 勝、小口妙子、小沢一枝、加賀美さか江、佐久間篤子、西川真人、野沢友彦、原田佳子、樋口きくゑ、樋口久子、垣内律子、望月厚子、渡部さつみ
協力者・協力機関	清水 博、櫛形町教育委員会

第2章 地理的環境

第1節 遺跡の立地

本遺跡は中巨摩郡橿形町小笠原地内に位置し（第1図1）、標高は約298mである。橿形町は歴史的には明治4年に廃藩置県が施行されて以後、多くの曲折を経たが、最終的に小笠原町・榊村・野之瀬村が合併し、後に豊村を併せて現在の橿形町が編成された経緯があり、町名は甲府盆地西方にある巨摩山地中央部に位置する橿形山をその由来としている。地理的には、県の西部、西郡と呼ばれる地域のほぼ中央に位置し、国道52号線が甲府盆地の西縁を南北に走り、西方には橿形山を中心とする巨摩山地やその後方の白峰三山や鳳凰三山等の南アルプスの山塊を仰ぎ見ることが出来る。

地形的には大まかに、御勅使川と橿形山を水源とする滝沢川などの諸河川が造る複合扇状地である東部の平地帯と、橿形山を中心とした西部の山付地帯に分けられる。本遺跡のある小笠原地区周辺は、これら扇状地の扇央部にあるため砂礫の堆積が厚く、地下水位の低い乾燥地となり干害を受けやすく、一方豪雨時には洪水に見舞われるという、稲作には適さない土壌で、古くより「原方」と呼ばれている。また養蚕業が盛んで、現在は果樹栽培を中心として発展してきた地域である。この低い地下水位は若草町の鏡中条・十日市場、甲西町の江原・古市場・鮎沢・下宮地付近で湧き出し、これより低地は豊かな湧水帯となり、釜無川の形成する「田方」と呼ばれる氾濫原へと連なっている。

第2節 周辺の遺跡（第1図）

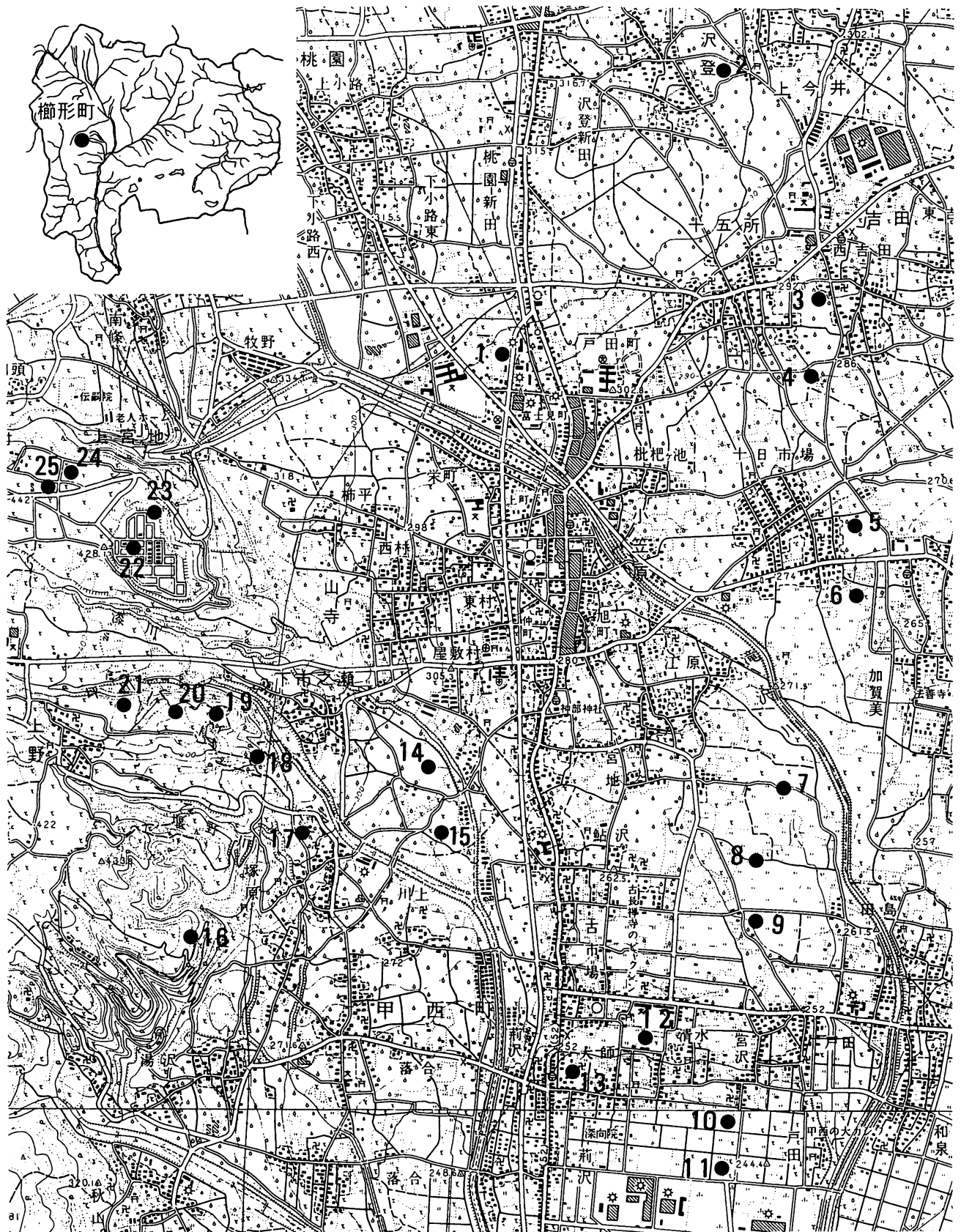
町内には、平成元年度の分布調査により、240ヵ所以上の遺跡が確認されているが、その内容は旧石器時代から近世まで多期にわたっている。これらのうち本遺跡の周辺について見てみると、まず町西側の甲府盆地を見下ろす上野台地上にある六科丘遺跡（22）が挙げられる。ここでは弥生時代後期の集落をはじめとして、隣接する六科丘古墳（23）とともに、旧石器時代から古墳時代までの遺構・遺物が発見されている。さらに西側には、東原遺跡（24）や長田口遺跡（25）などの集落遺跡がある。

坪川を挟んで南には、上の山遺跡（21 縄文）・上ノ東遺跡（20 縄文・弥生）と続き、台地の先端に峡西地域唯一の前方後円墳である物見塚古墳（18）が立地する。上ノ東古墳（19）や六科丘古墳と合わせ、この地域の墳墓の動向を捉えることが出来る。市之瀬台地直下の鋳物師屋遺跡（14）では、縄文時代中期や平安時代の集落跡が発見され、隣り合うメ木遺跡（15）とともに出土品の縄文土器や土偶、石器の中には国の重要文化財に指定されているものもある。

一方、平成元年度から始まった国道52号の改築・中部横断自動車道建設工事関係の調査では、厚い扇状地堆積土の下から新しい発見が相次いだ。橿形町内では七ッ打C遺跡（2 中世・近世）、若草町にかけて広がる十五所遺跡（3）・村前東A遺跡（4）で、弥生時代の水田や方形周溝墓群、古墳時代前期の大規模な集落が発見された。さらに南下すると、新居道下遺跡（5）で古墳時代から奈良時代にかけての集落が、二本柳遺跡（6）では中世の水田・寺院跡が確認された。そして甲西町に入ると、向河原遺跡（7）・油田遺跡（8）・中川田遺跡（9）・大師東丹保遺跡（10）・宮沢中村遺跡（11）において、弥生時代から古墳時代・中世・近世の遺構・遺物が生々しい状態で発掘された。この他、縄文時代の昼喰場遺跡（17）、弥生時代では、清水遺跡（12）・住吉遺跡（13）・御前山遺跡（16）などもある。

このように、これらの遺跡の詳細な分布調査・発掘調査によって扇状地の遺跡の実態が明らかになり、峡西地域の歴史は大きく変わろうとしている。

（清水裕司）

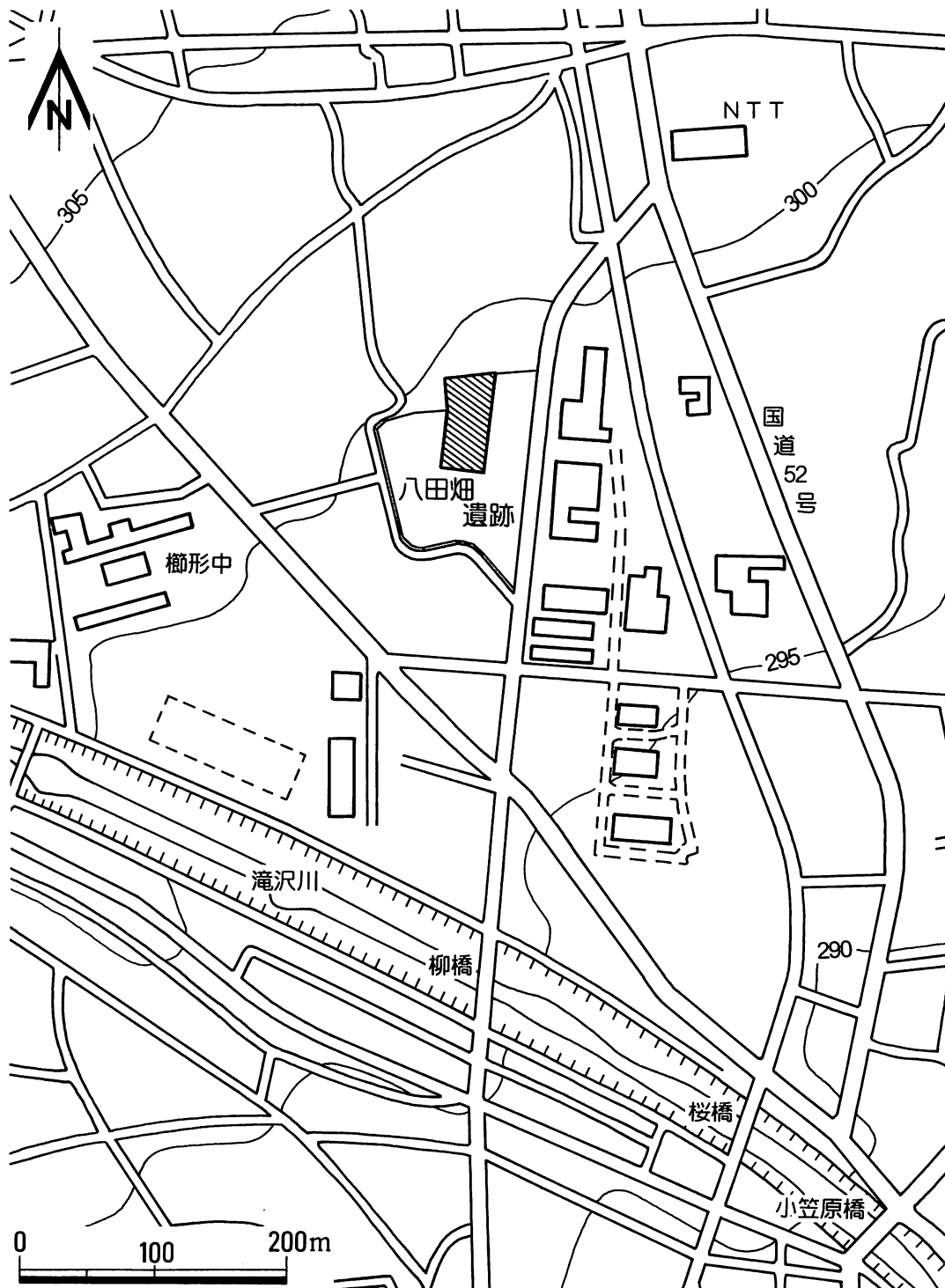


- | | | | | | | |
|-----------|-----------|-------------|------------|-----------|-----------|------------|
| 1. 八田畑遺跡 | 2. セツ打C遺跡 | 3. 十五所遺跡 | 4. 村前東A遺跡 | 5. 新居道下遺跡 | 6. 二本柳遺跡 | 7. 向河原遺跡 |
| 8. 油田遺跡 | 9. 中川田遺跡 | 10. 大師東丹保遺跡 | 11. 宮沢中村遺跡 | 12. 清水遺跡 | 13. 住吉遺跡 | 14. 鑄物師屋遺跡 |
| 15. メ木遺跡 | 16. 御前山遺跡 | 17. 昼喰場遺跡 | 18. 物見塚古墳 | 19. 上ノ東古墳 | 20. 上ノ東遺跡 | 21. 上の山遺跡 |
| 22. 六科丘遺跡 | 23. 六科丘古墳 | 24. 東原遺跡 | 25. 長田口遺跡 | | | |

第1図 遺跡位置及び周辺遺跡分布図 (1:25,000)

【参考文献】

- 櫛形町教育委員会 1983 『物見塚』
角川書店 1984 『日本地名大辞典』第19巻
櫛形町教育委員会 1985 『六科丘遺跡』
櫛形町教育委員会 1986 『ノ木遺跡』
櫛形町教育委員会 1988 『遺跡をたずねて』
櫛形町教育委員会 1990 『町内遺跡詳細分布調査報告書』
平凡社 1995 『山梨県の地名』

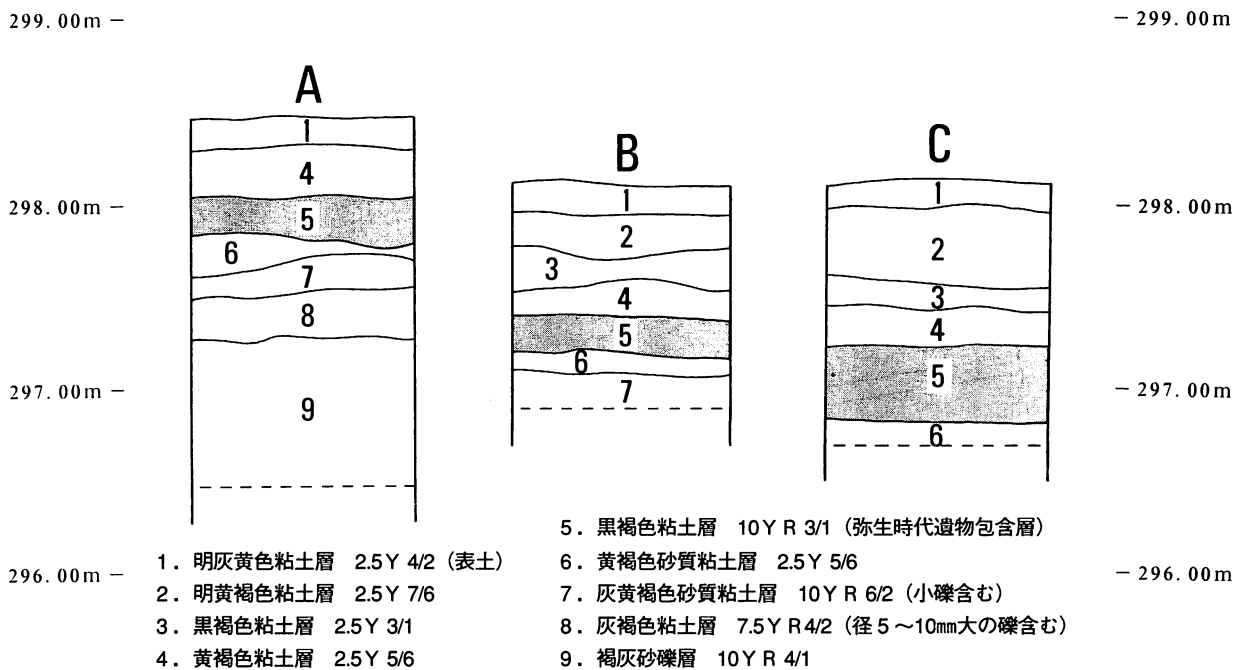
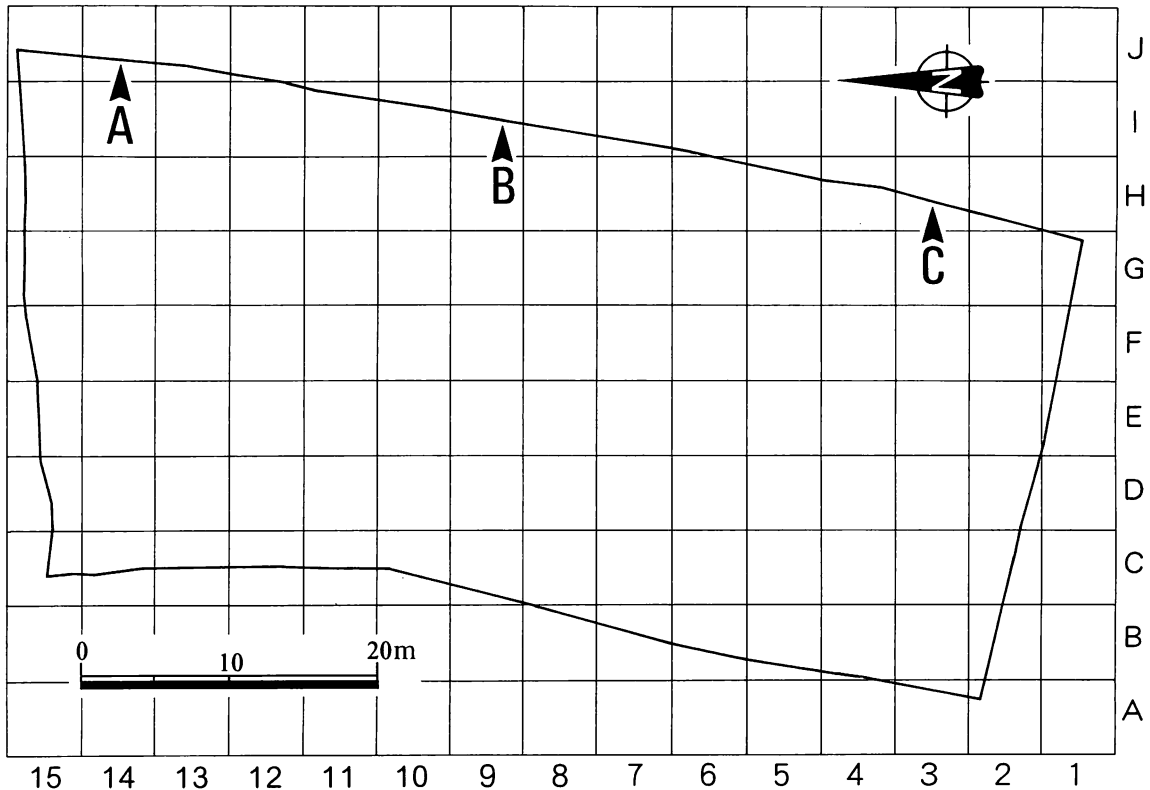


第2図 調査区位置図 (1:5,000)

第3節 遺跡の層序 (第3図)

次に、本遺跡での層序について概観しておく。

第1節でも述べたが、本遺跡のある小笠原地区周辺は、地形的には御勅使川と滝沢川などの諸河川が造る複合扇状地の扇央部にあたる。北西から南東へ向かって傾斜しており (第2図)、それは本遺跡の土層の堆積からも確認することが出来る。しかし調査区内は東洋カーボン社のグラウンドとして、造成の際に大規模な整地が行われており、地表下50cm前後の第3層までは人為的な盛り土が行われていたことがわかる。

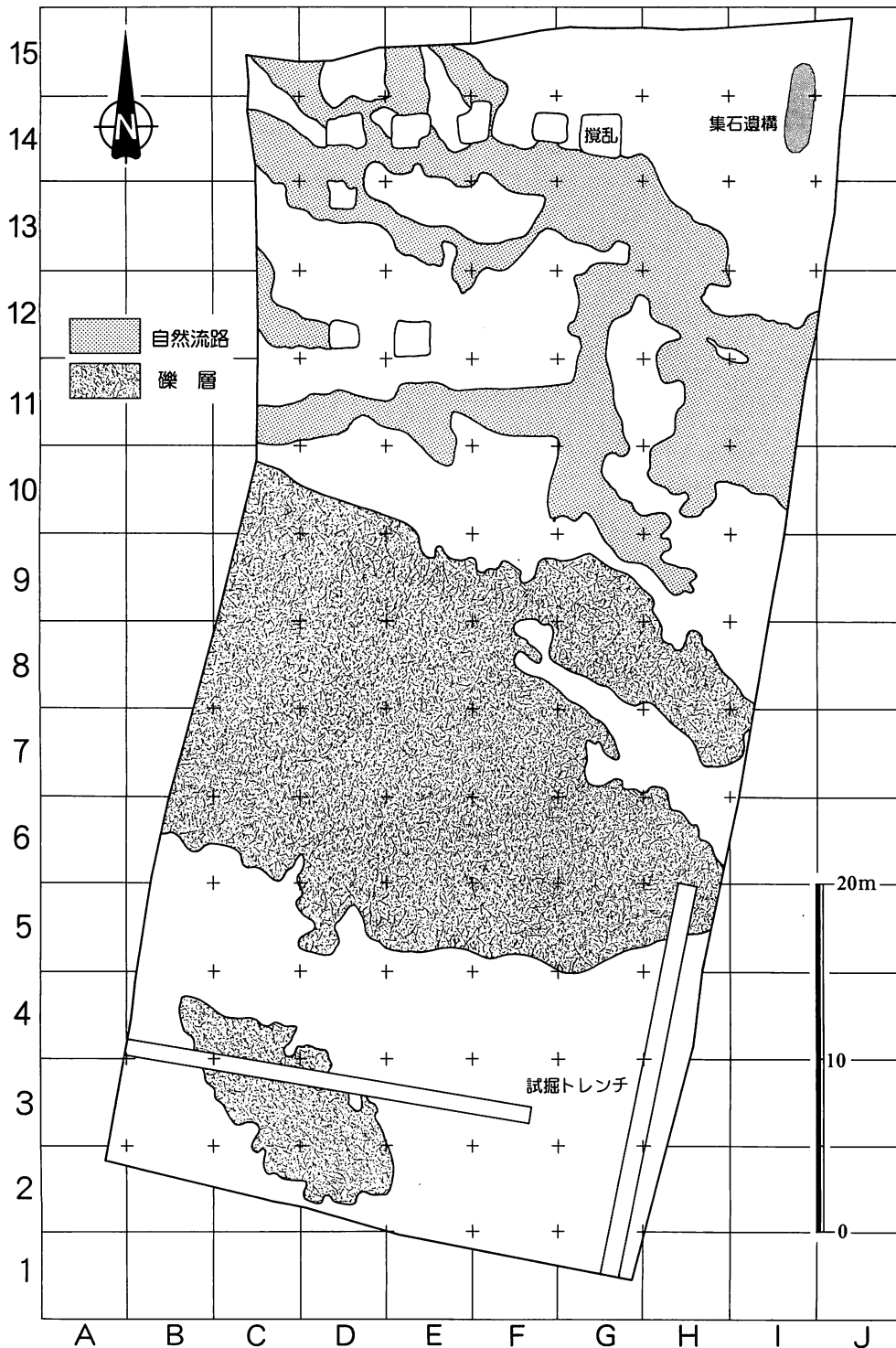


第3図 土層観察地点 (1:500) と土層断面図 (1:40)

第4層以下は自然堆積層が残存しており、この中の第5層とした黒褐色土層が弥生時代の遺物包含層である。だが残りは決して良いとは言えず、調査区中央部では砂礫が広がっている。

第6層以下は氾濫の影響が大きく、堆積は安定していない。第6層の黄褐色土層の面では、調査区北側で自然の流路が北西から南東に向って確認されたのみで、遺構は存在しなかった。第7・8層も礫や砂粒を含み、さらに第9層以下は砂礫層の厚い堆積が続く。これは調査区西壁においても確認出来ており、この一帯が北西方向からの氾濫によって形成されたことが理解できる。

(小林健二)



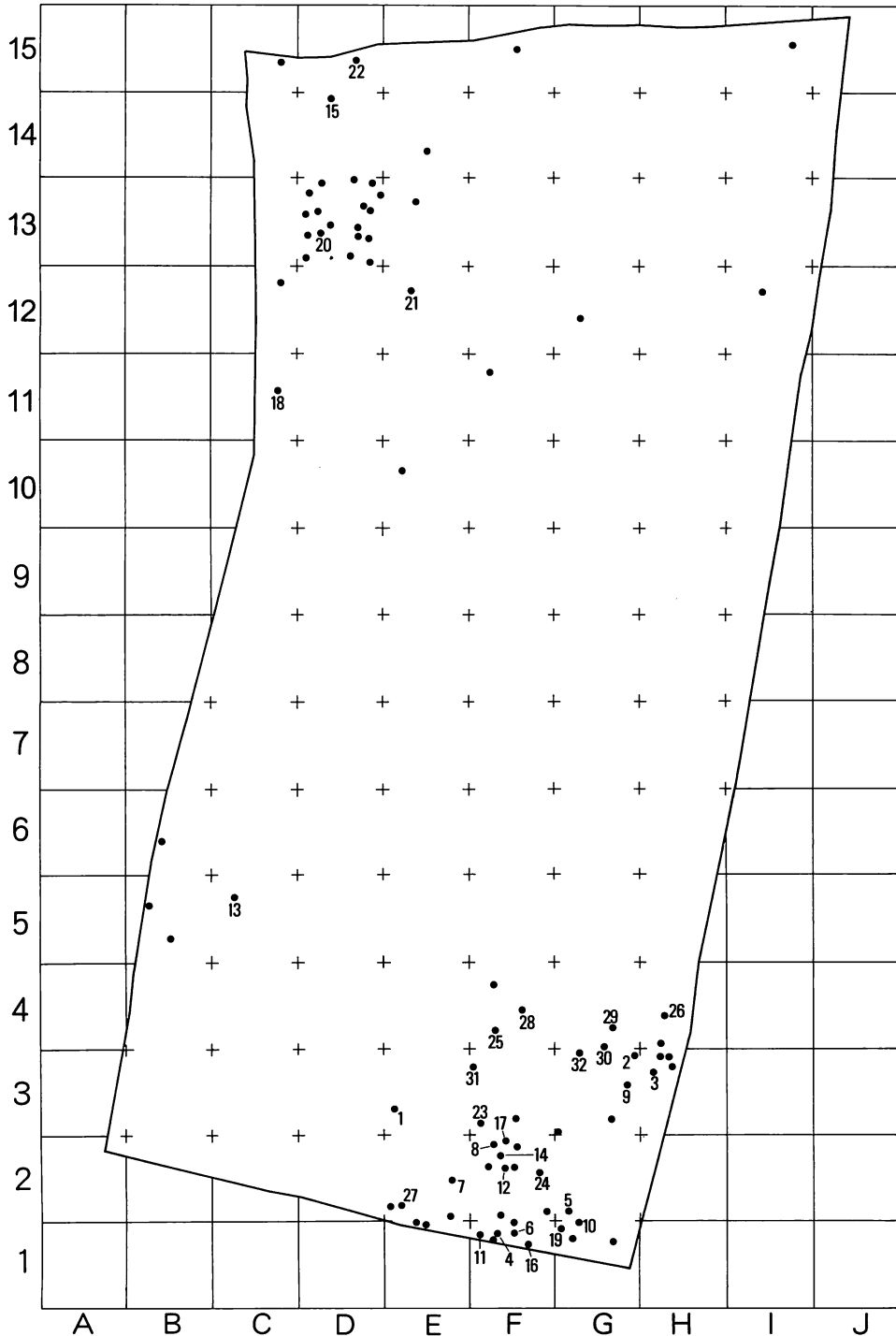
第4図 遺跡全体図 (1:400)

第3章 発見された遺構と遺物

第1節 弥生時代の遺物 (第5・6図)

(1) 出土状況

第5層とした黒褐色土の包含層から、弥生時代前期から後期にかけての土器片が混然として出土した。しかしこの層及び第6層の黄褐色土に至っても、自然の流路が確認されたのみで、該期の遺構は発見されなかった。土器は調査区の北西隅と南東隅で比較的まとまって出土した(第5図)。氾濫で流されてきた



第5図 弥生時代包含層出土土器分布図 (1:400、番号は第5図の土器番号)

とみられ磨滅しているものが多く、特に調査区北西隅出土のものは角が丸くなっており、調整が確認出来ないほど器面が荒れている。ここでは出土した90点ほどのうち、図化出来たものを掲載した（第6図）。

(2) 出土土器

1は甕もしくは深鉢の口縁部破片とみられるもので、横方向に沈線を施している。色調は外面が褐色、内面は黄橙色を呈し、胎土は粗く白色粒子、雲母を多量に含んでいる。

2～6は壺の頸部付近の破片と思われる。2～4・6はいずれも条痕文を施しているが、5については不鮮明である。2は色調は内外面とも橙色、胎土には白色粒子を含む。3は色調は内外面とも橙色、胎土は白色粒子を多く含み粗い。4は外面橙色、内面橙色の色調で、白色粒子を含む胎土。5は色調は外面にぶい褐色、内面にぶい橙色、胎土は白色粒子、雲母を多量に含み粗い。6は外面橙色、内面明るい赤褐色を呈し、赤色粒子、白色粒子を含む胎土である。

7～18は壺の体部破片で、やはり条痕文を施している。7は色調は外面にぶい橙色、内面黒色、胎土は白色粒子を多量に含み粗い。8は色調は外面にぶい褐色、内面にぶい橙色で、胎土は白色粒子、雲母を多量に含み粗い。9は内外面ともにぶい橙色の色調で、白色粒子を含む胎土である。10は内外面とも明褐色の色調、白色粒子を含む胎土。11の色調は内外面ともにぶい褐色で、胎土には白色粒子を含む。12の色調は内外面とも明るい褐色で、胎土に赤色粒子、白色粒子を含んでいる。13は内外面ともにぶい黄橙色の色調、胎土は赤色粒子、白色粒子、雲母を多量に含み粗い。14の色調は外面褐色、内面明るい赤褐色で、胎土は白色粒子を含む。15は内外面ともにぶい褐色の色調で、白色粒子、雲母を含む胎土。16は色調内外面ともにぶい橙色、胎土は白色粒子を含む。17は外面橙色・内面黒色の色調、胎土は白色粒子を含む。18は内外面とも色調橙色、胎土は赤色粒子、白色粒子、雲母を含む。

19・20は壺の口縁部破片で、調整は不鮮明。19の色調は外面にぶい黄橙色、内面橙色で、胎土は白色粒子を含む。20は色調は内外面とも橙色、胎土は赤色粒子を多量に含み粗い。

21は台付甕の口縁部破片。端部に刻みが入り、内外面ともにハケメを施す。色調は内外面ともにぶい褐色で、胎土には白色粒子を含んでいる。

23・24は台付甕の体部破片である。外面にハケメがわずかに確認出来る。23は色調は内外面とも橙色、胎土は白色粒子を含む。24は外面橙色、内面にぶい橙色の色調で、白色粒子を含む胎土である。

22・25～28は壺の体部破片である。磨滅が激しく、調整は確認できない。22は色調は内外面ともにぶい黄橙色、赤色粒子、白色粒子を含む胎土である。25は外面にぶい赤褐色、内面赤褐色を呈し、胎土は白色粒子を多量に含み粗い。26は内外面ともにぶい橙色の色調、赤色粒子をわずかに含む胎土。27の色調は内外面ともにぶい橙色、胎土は赤色粒子、白色粒子、雲母を多量に含む。28は内外面とも橙色の色調、白色粒子を含む胎土である。

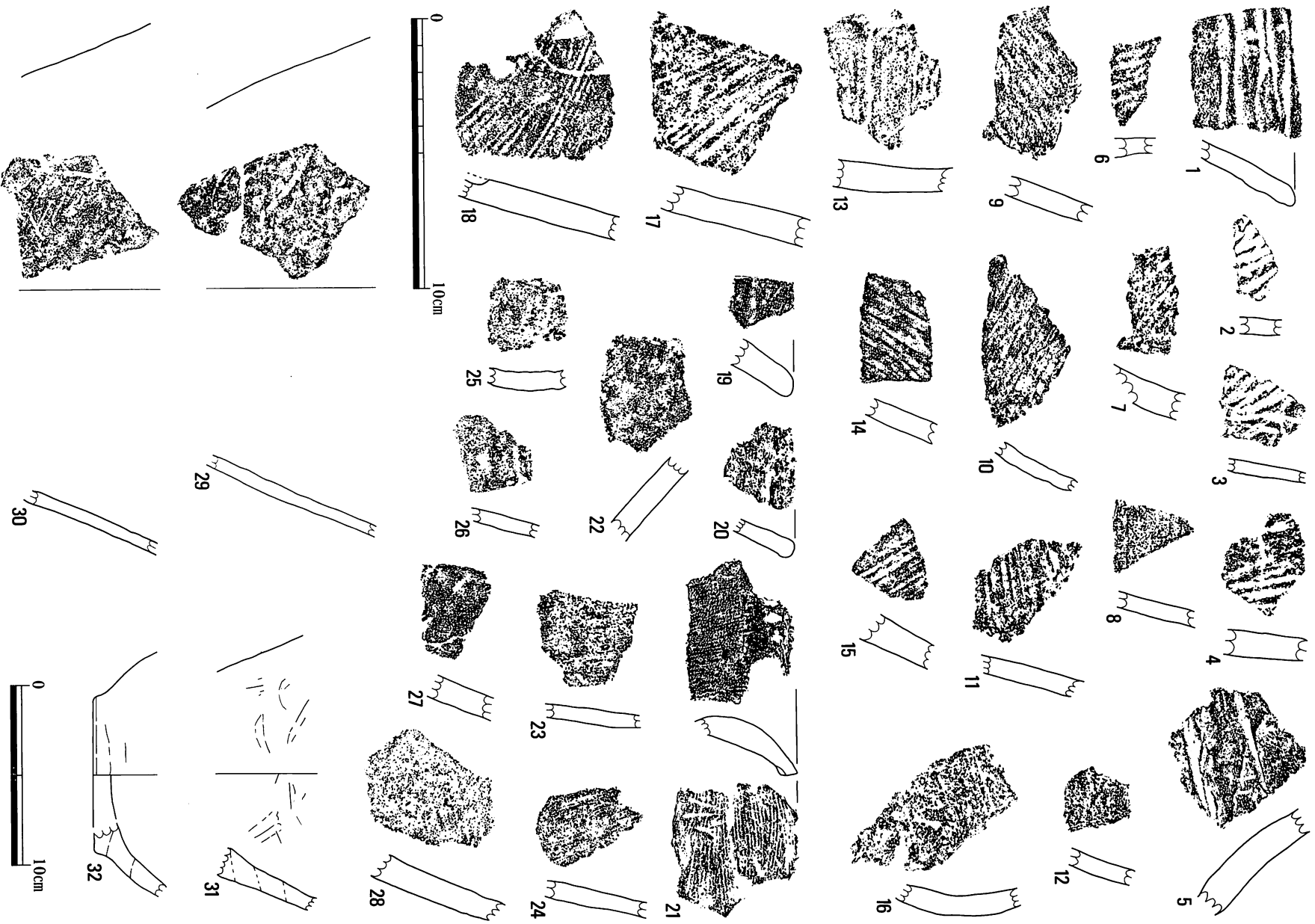
29・30は深鉢もしくは甕の体部下半の破片で、同一個体の可能性もある。調整は不鮮明であるが、外面にケズリと見られる調整痕がある。29は色調は外面暗褐色、内面にぶい褐色、30は外面暗褐色、内面にぶい黄褐色、胎土はともに白色粒子を含んでいる。

31は壺の体部下半部の破片で、内外面にハケメが確認でき、内面には指ナデ痕も見られる。色調は内外面ともにぶい赤褐色で、胎土は白色粒子、雲母を多量に含み粗い。

32は壺の体部下半から底部にかけての破片である。底径は8.4cmを測り、色調は外面浅黄橙色、内面にぶい橙色で、胎土には白色粒子を含む。

これらの出土土器は、いずれも小破片のため器種の特定期決定は難しいが、1については浮線文の系譜を引くものとも考えられるが、おおむね弥生時代前期後葉から中期前葉にかけてのもの（1～18・29・30）と後期のもの（19～28・31・32）とに分けることが出来よう。

（小林健二）



第 6 图 弥生时代包含層出土土器 (1~28 1:2、29~32 1:3)

第2節 集石遺構（第1表・第7図）

調査区の北東隅に位置する、ほぼ南北方向に3基並ぶ根石状の集石である。第6層黄褐色土層直上で検出された。個々について順に見ていくと、最も北側の集石1は10～15cmの礫を長方形に集めたもので、合計21個の礫で構築されている。中央の集石2は同じくほぼ正方形に礫を集めたもので、合計14個の礫で作られている。いちばん南側の集石3は円形状に礫を集めており、集石1・2に比べてやや大きめの礫が目立つ。また、3基ともにコンクリート片などの付着する礫が見られた。

礫の置き方を見ると、集石1・2は礫全体がほぼ水平に並んでいるのに対して、集石3は中央部がやや凹んだ形で礫が並んでいる。礫のレベルについても前者の2基に対して10cmほど低い。上述のように平面形・エレベーションの観察、使われている礫の大きさなどからも、集石1・2と集石3とで若干の違いを指摘できよう。また、3基は南北方向に並んではいるものの、厳密に言えばその主軸は一致せず、個別の集石の観察から言っても、集石1・2を通る軸に対して、集石3はそれから若干ズレていると考えるのが自然であろう。

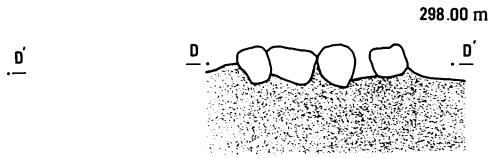
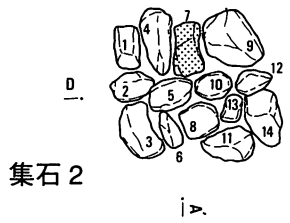
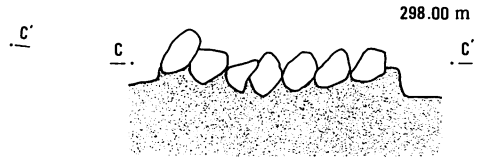
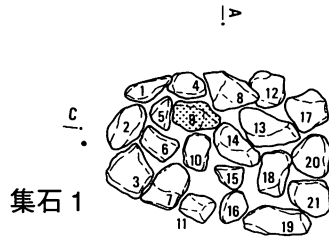
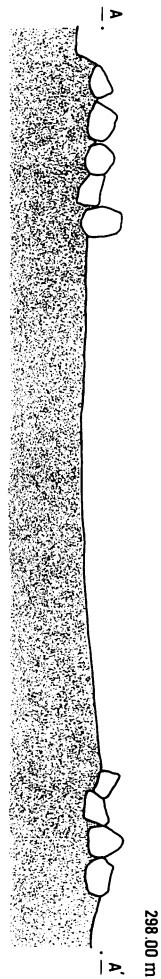
(市川恵子)

第1表 集石遺構礫計測値一覧

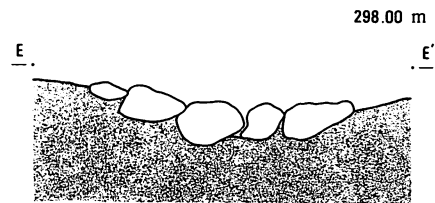
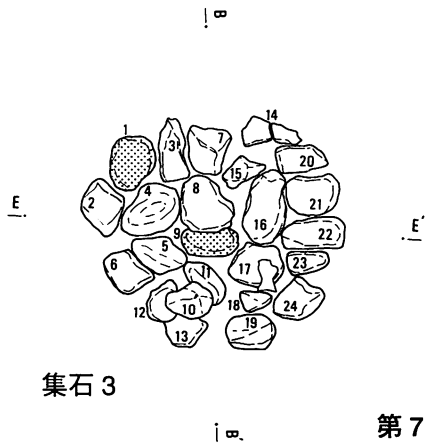
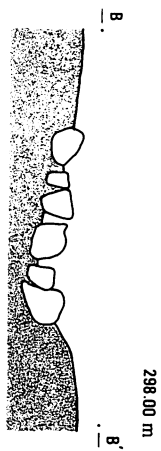
[集石1]						[集石2]						[集石3]					
	長径 cm	短径 cm	幅 cm	重量 kg	備 考		長径 cm	短径 cm	幅 cm	重量 kg	備 考		長径 cm	短径 cm	幅 cm	重量 kg	備 考
1	14.3	8.9	7.5	1.6		1	13.8	10.4	7.7	1.6		1	14.7	11.2	7.8	1.7	◎スス付着
2	15.1	13.3	6.3	1.8		2	11.5	9.8	6.0	1.0		2	15.2	13.1	5.3	1.4	スス付着
3	15.3	11.1	9.0	2.1		3	17.0	8.8	6.4	1.5	コンクリート付着	3	17.3	12.0	7.7	1.8	
4	9.0	10.0	8.3	1.5		4	22.2	12.3	6.4	2.4		4	18.8	11.3	10.1	3.2	
5	11.0	8.8	8.0	1.3		5	12.6	10.7	4.9	1.2		5	15.2	9.4	7.4	1.5	
6	16.3	10.5	8.3	2.1		6	12.0	9.3	6.1	0.9	コンクリート付着	6	9.8	9.7	6.9	1.0	
7	15.6	13.6	7.5	2.2		7	16.4	12.3	6.0	2.4	◎	7	15.9	13.5	8.0	2.2	
8	14.1	10.0	8.0	1.6		8	13.2	10.5	7.2	1.2	コンクリート付着	8	19.7	15.0	11.5	3.4	
9	7.5	14.5	8.1	3.2	◎	9	19.2	15.5	7.9	2.8		9	17.6	13.6	11.6	3.4	◎コンクリート付着
10	17.7	15.3	10.1	3.5	コンクリート付着	10	13.4	12.1	9.1	1.9		10	13.9	9.4	6.7	1.3	コンクリート付着
11	13.1	9.9	7.3	1.5	漆喰?付着	11	17.1	14.7	5.6	1.8	コンクリート付着	11	18.5	11.8	11.0	3.2	コンクリート付着
12	11.2	12.6	9.0	1.7		12	13.6	12.5	9.0	1.8		12	13.7	11.1	7.9	1.5	
13	13.9	9.6	7.0	1.6		13	14.1	10.8	6.9	1.2		13	12.9	11.4	9.6	1.8	
14	11.9	14.4	7.6	1.9	コンクリート付着	14	15.8	11.1	10.1	2.4		14	16.9	9.5	5.9	1.1	
15	15.1	11.5	8.0	1.5								15	15.8	8.6	7.3	1.1	
16	9.0	11.5	8.3	1.4	コンクリート付着							16	22.9	14.6	9.2	4.2	
17	10.5	12.0	9.4	2.1								17	16.8	14.7	12.2	3.5	コンクリート付着
18	18.8	15.3	5.7	2.3								18	14.5	12.8	8.0	1.9	コンクリート付着
19	15.6	9.7	7.9	1.7								19	12.4	10.8	4.6	0.8	
20	12.1	14.1	7.8	1.7								20	12.8	12.5	5.6	1.3	
21	11.5	11.0	7.8	1.4								21	16.2	14.4	9.5	3.2	
												22	22.6	12.7	9.6	3.8	
												23	17.8	10.3	10.0	2.5	
												24	16.1	10.2	9.8	2.3	

※ ◎印は擦痕・敲打痕のある礫

詳細は第4章 まとめ-第2節 集石遺構に記載。



··· 擦痕・敲打痕のある礫



第7図 集石遺構平面図・エレベーション (1:20)

第4章 まとめ

本遺跡では、弥生時代前期から後期にかけての土器片と、きわめて新しい時代のものと見られる集石遺構が発見された。今回得られた情報自体は少ないが、以下これらについて、若干の考察をもってまとめに代えることにする。

第1節 弥生土器について

(1) 八田畑遺跡の弥生土器

第3章第1節において、出土した土器を弥生時代前期から中期のものと、後期のものに分けておいた。これらはいずれも小破片のため器種の特定が困難であり、また時期ごとに分層出来るような出土状況ではなく、時期についても誤りがあるかもしれない。よってここでは特徴的な条痕文を施した土器(第6図2～18・29・30)を中心に上げ、概観するにとどめる。なお、土器の時間的な位置づけについては、中山誠二、保坂和博の両氏にご教示いただいた。

1については浮線文が沈線文化し、形骸化したものと考えられる。また29・30については、細い竹を割いて引っ掻いたような粗い条痕文を施しており、「荊谷原・柳坪式」(註1)の特徴を持っている。

その他の条痕文にもいくつかの種類があり、クシ状工具を施したもの、ヘラ状工具のもの、棒状工具のものなどがあり、中部型の粗い条痕文(註2)として捉えられるが、17・18のように条痕文の幅が狭くなるものもあり、時期的にはもう少し新しくなる可能性もある。

以上を手がかりにすれば、これらの土器は前期後葉から中期前葉の範疇で考えられるが、個々の詳細な帰属時期については小破片のため言及することは難しい。

後期については、21の台付甕の口縁部破片は端部に刻みが入ったもので、後期後葉から末葉にかけて非常に多くみられるものである。本遺跡の西側に位置する六科丘遺跡、東側にある十五所遺跡(註3)、村前東A遺跡(註4)での状況を考慮すれば、本遺跡のごく近くにも、後期の集落が存在することは容易に推察がつくであろう。しかし、これ以外のもので後期としたものについては、残存率から器種・時期を確証出来るものではなく、多くを語ることは危険かもしれない。

本遺跡で出土した土器片のほとんどは、割れ口面が磨滅したり器面が荒れていることから、氾濫により流されてきたことは明らかである。該期の集落については、流路の方向から本遺跡の北西側の緩斜面上に存在するものと思われる。扇状地という地形から、多くは洪水に見舞われていることが予想され、実際には洪水を逃れたものが筋状に点在することになるだろう。

(2) 峡西地域の弥生時代の動向

ところで本県では、弥生時代でも特に中期の遺構・遺物が発見された遺跡は少なく、最も空白が多い時期である。しかし近年になって、徐々に出土例が増えてきている。ここでは本遺跡周辺の弥生時代中期の遺跡を中心に、その動向について考えてみたい。

峡西地域における中期の資料について挙げてみると、橿形町では先述の十五所遺跡、村前東A遺跡、若草町の二本柳遺跡(註5)、甲西町の向河原遺跡(註6)、油田遺跡(註7)、大師東丹保遺跡(註8)がある。これらは第2章第1節でも述べたが、国道52号の改築・中部横断自動車道建設工事関係の大規模な調査であり(第1図6～10)、従来の調査では出来なかった、地下の深い部分への調査が可能になったことが発見の要因でもある。このうち、十五所遺跡、村前東A遺跡、八田畑遺跡では遺構に伴ってはいないものの、条痕文土器の出土から該期の生活の痕跡が認められる。また本遺跡では、前期に遡る可能性のある土器片も出土しており、今後の調査での資料の増加に期待したい。

一方、向河原遺跡では中期後葉の水田面から甕が出土しており、油田遺跡では中期前葉から後葉にかけての土器が、埋没旧河道や包含層から石器・木製品(竪杵)とともに多数出土している(註9)。また大師東丹保遺跡Ⅰ区第三面(地表下約4m)では、溝から中期後葉の壺・甕などが確認されており、付近に集落があったことを窺わせる。特にこの一帯は甲府盆地でも低位の氾濫原にあり、水田経営のため、豊富な湧水を求め扇状地の開拓が積極的に行われていたことがわかる。

このように、扇状地扇央部から扇端部、さらに沖積低地への開発が弥生時代以降始まっていた(註10)ことが、最近の調査で明らかになってきた。

後期になると、既に述べたように、櫛形町の十五所遺跡や六科丘遺跡、長田口遺跡、甲西町の大師東丹保遺跡Ⅰ区第二面、住吉遺跡(註11)などがある。六科丘遺跡と住吉遺跡では住居跡から良好な一括資料が出土しており、該期の土器編年の基準資料となっている。そしてこの頃から次の古墳時代前期にかけては、土器様相に大きな変化が起こる。それは在来の系譜を引く土器群とは別に、東海系土器を主体とした土器群の波及であり(註12)、新しい時代の幕開けとともに、大規模集落である村前東A遺跡が出現する。そこにはS字甕A類(註13)を携えた、東海からの人々の移住が考えられる。

以上のように、峡西地域では特に弥生時代中期の遺跡の発見により、ようやくではあるがその様相が見えてきた。しかし数量的には後期に比べると依然として少なく、集落構造など解明出来ない部分が多い。今回の本遺跡の調査でも該期の遺構は発見されず、遺物の出土点数も少なかったが、遺跡の立地を考える上では一つのデータを提供したことになるだろう。

(小林健二)

註

1. 中村友博 1988「苜谷原・柳坪式を設定して、条痕文土器を体系化すること」『<条痕文系土器>文化をめぐる諸問題—縄文から弥生—』資料編Ⅱ・研究編 愛知考古学談話会
2. 中山誠二 1993「甲斐弥生土器編年の現状と課題—時間軸の設定—」『研究紀要』9 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター
3. 山梨県教育委員会 1995～97『十五所遺跡Ⅰ～Ⅲ』山梨県埋蔵文化財センター調査報告第104・113・128集
4. 山梨県教育委員会 1994～97『村前東A遺跡概報1～4』山梨県埋蔵文化財センター調査報告第90・103・112・134集
5. 中山誠二・小林健二 1993「二本柳遺跡」『年報』9 山梨県埋蔵文化財センター
6. 山梨県教育委員会 1997『向河原遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告第129集
7. 山梨県教育委員会 1994『油田遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告第87集
8. 山梨県教育委員会 1997『大師東丹保遺跡Ⅰ区』山梨県埋蔵文化財センター調査報告第131集
9. 保坂和博 1997「油田遺跡—弥生時代の出土遺物を中心にして—」『甲斐路』86 山梨郷土研究会
10. 保坂康夫 1990「第Ⅲ編 第1章 原始・古代の遺跡」『若草町誌』若草町誌編纂委員会
11. 甲西町教育委員会 1981『住吉遺跡』
12. 小林健二 1993「山梨県域の土器様相」『東日本における古墳出現過程の再検討』日本考古学協会新潟大会実行委員会
13. 赤塚次郎 1986『「S字甕」覚書'85』『年報 昭和60年度』(財)愛知県埋蔵文化財センター

第2節 集石遺構について

3基の集石は、形態的に、また使用されている礫の大きさから、集石1・2と集石3とで若干の違いを指摘できる。また、3基はほぼ南北に並ぶものの、集石1・2を通る軸に対して集石3はわずかにズレている。現状では、このような根石状の集石は3基のみしか発見されなかった上に、周辺にも同様の礫の散在は見られなかったが、本来はこれらが規則的に並び、建物あるいは塀などの礎石として使われていた可能性もあるだろう。発掘調査を行なう以前は、調査地には東洋カーボン社の関連施設があったが、これらの集石は現地表面から50cmほど掘り下げた包含層直下で発見されていることから、東洋カーボン社以前の所産であるものと考えられる。しかしながら、3基の集石それぞれにはコンクリート片などの付着した礫が含まれていることから、現代の遺構であることには間違いはない。

ところで、これら集石を構成する礫の中には、擦痕・敲打痕の見られるものも含まれていたもので、ここに挙げておく(第8図)。

(市川恵子)

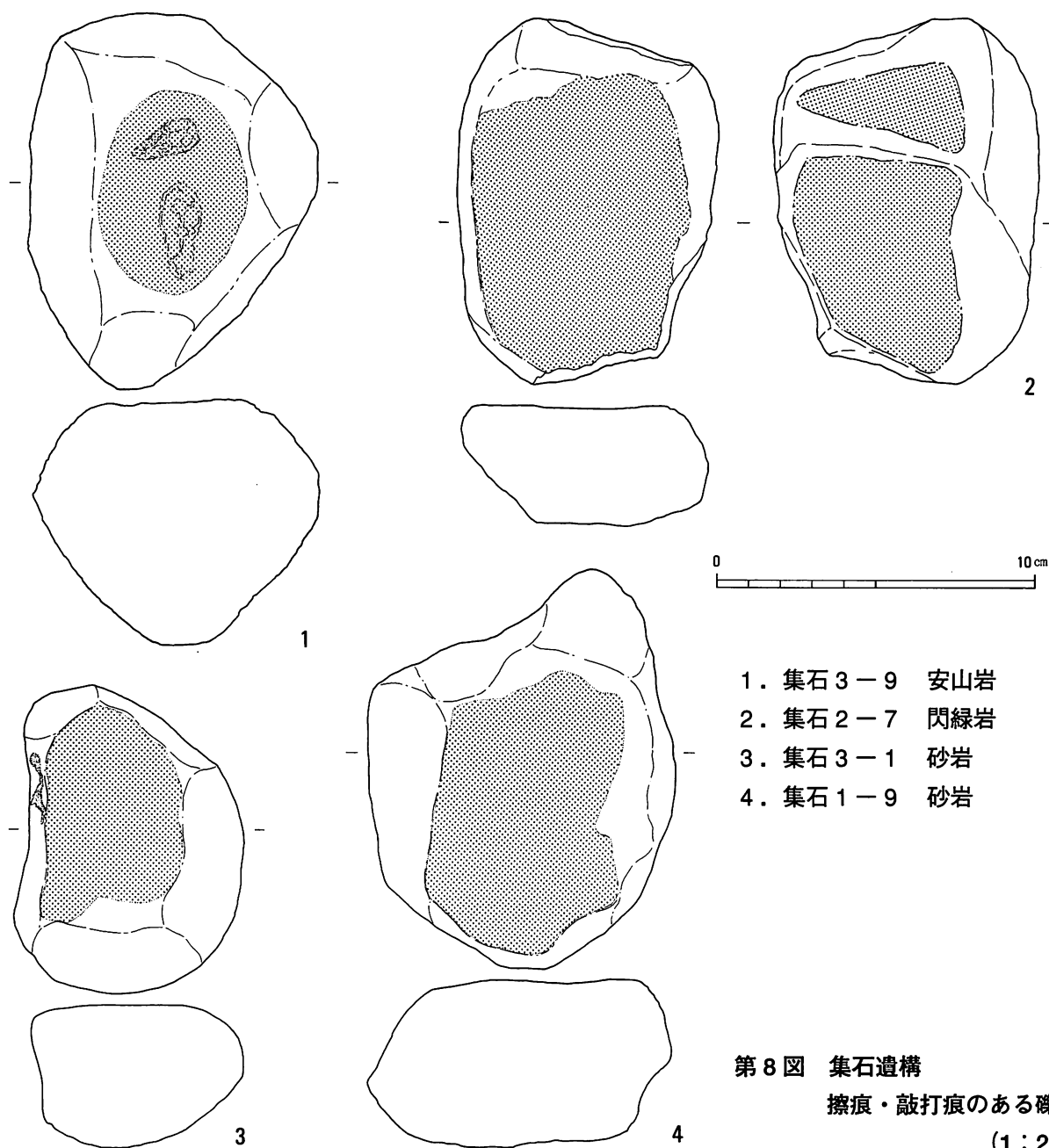
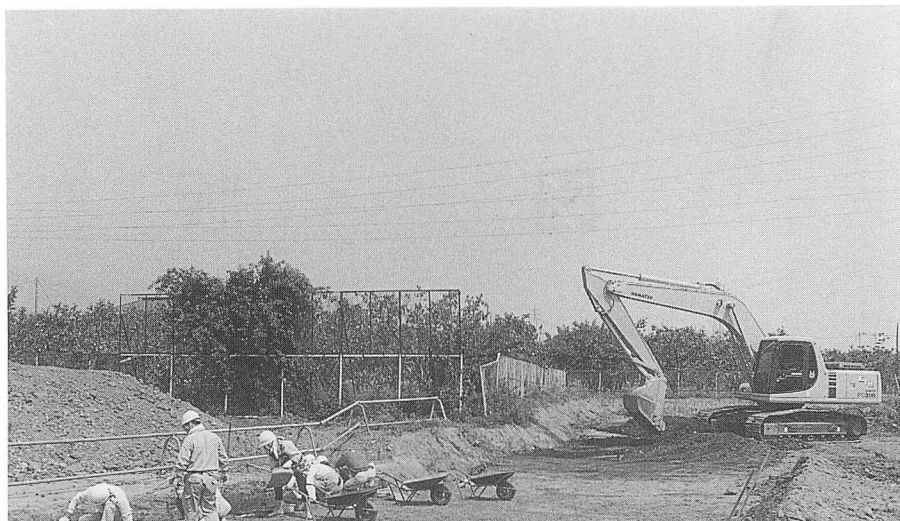


図 版



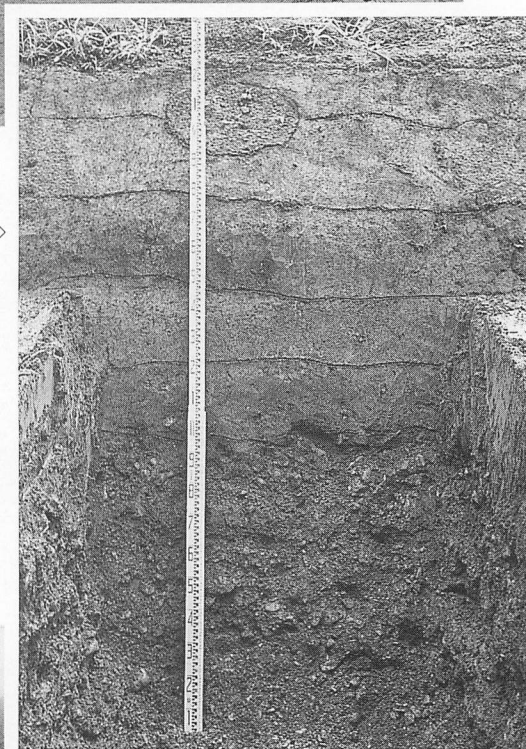
遺跡遠景—櫛形あやめが丘団地（六科丘遺跡）から甲府盆地を望む—

図版 1



1. 表土剥ぎ及び
西壁調査風景
(南から)

弥生時代遺物包含層⇨



2. 東壁土層断面 (A地点)



3. 北側調査風景
(東から)

図版 2

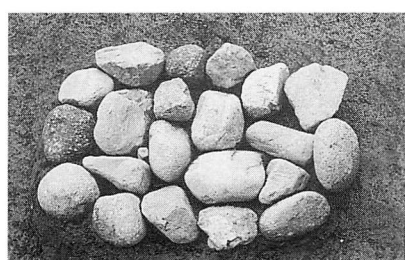


1. 自然流路
(東から)

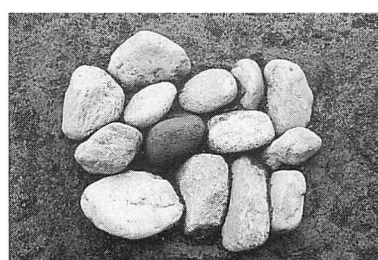
2. 集石遺構検出風景
(東から)



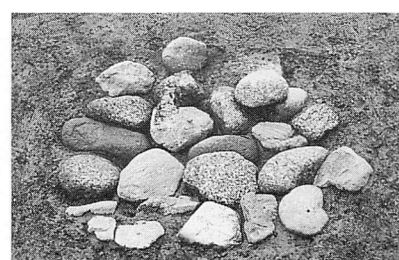
3. 集石遺構全景
(西から)



4. 集石 1 (北から)



5. 集石 2 (同)

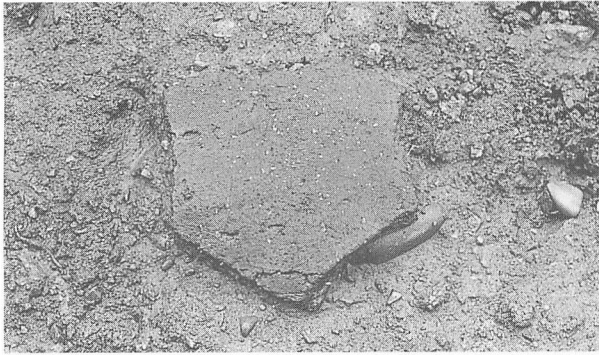


6. 集石 3 (同)

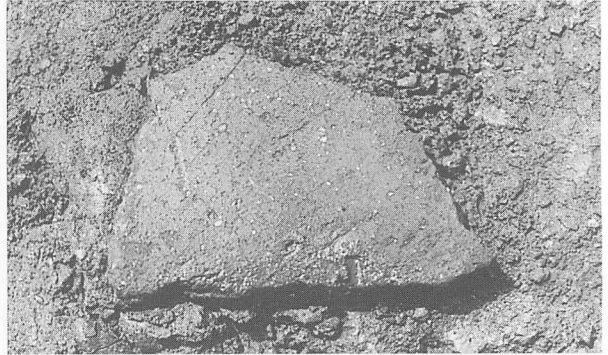
図版 3



1. 南側調査風景
(北から)

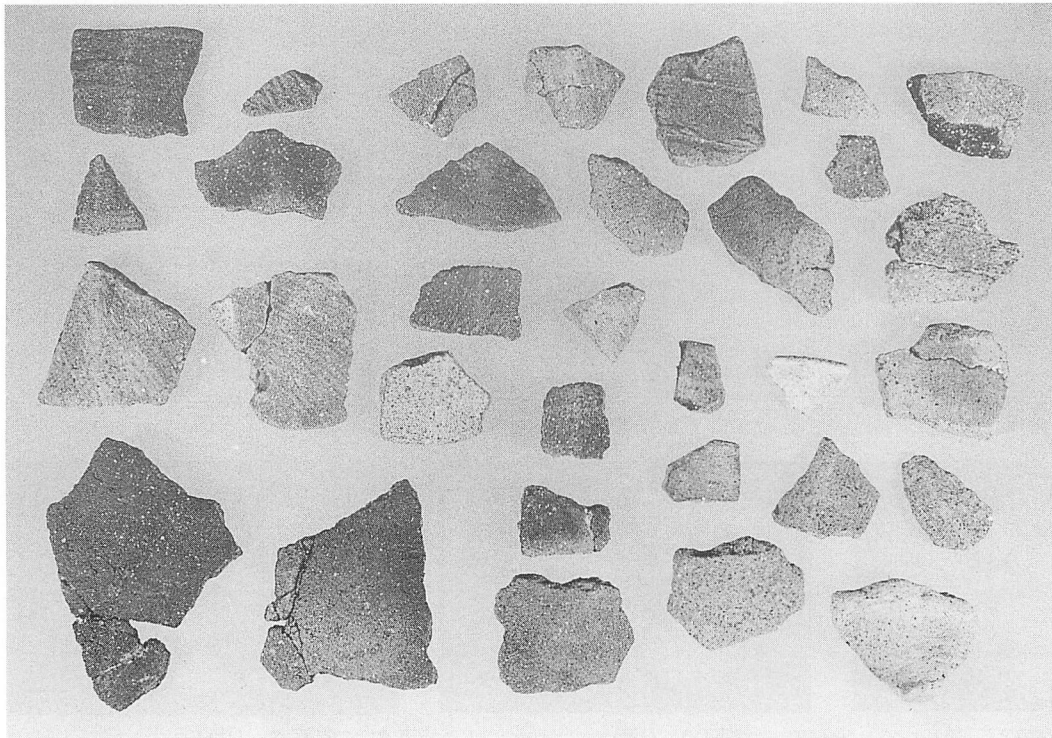


2



3

弥生土器出土状況



4. 包含層出土
弥生土器

報 告 書 概 要

フリガナ	ハッタバタイセキ		
書 名	八田畑遺跡		
副 題	県営住宅櫛形小笠原団地建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書		
シリーズ	山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第150集		
著者名	小林健二・市川恵子・清水裕司・依田幸浩		
発行者	山梨県教育委員会・山梨県土木部		
編集機関	山梨県埋蔵文化財センター		
住所・電話	山梨県東八代郡中道町下曾根923 〒400-1508 0552-66-3016		
印刷所	株式会社ヨネヤ		
印刷日・発行日	平成10年3月20日・平成10年3月27日		
ハッタバタイセキ 八田畑遺跡	所在地	山梨県中巨摩郡櫛形町小笠原字八田畑	
	25,000分の1地図名・位置・標高	小笠原	北緯35° 36' 45" 東経138° 28' 01" 標高298m
概 要	主な時代	弥生時代、近代～現代	
	主な遺構	集石遺構	
	主な遺物	弥生土器	
	特殊遺構	なし	
	特殊遺物	なし	
	調査期間	1997年5月6日～同年9月6日	

山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第150集

1998年3月20日 印刷

1998年3月27日 発行

八田畑遺跡

編 集 山梨県埋蔵文化財センター
山梨県東八代郡中道町下曾根923
TEL 0552-66-3016

発 行 山 梨 県 教 育 委 員 会
山 梨 県 土 木 部

印 刷 株 式 会 社 ヨ ネ ヤ

